

911.1
セ
3

丹野抄卷之三

深川藏

井蛙抄第三

代々家^{シヤ}近不^シ彦^ハ幾^ニら^ハく^ニ由^リ社^ノ中^ニも^シ河^ノと^モ色^ノも

ある^ハひ^ニを^シ優^ク羨^ムな^リと^シた^レよ^リ我^ガを^シ羨^ム理^ノの^コ

く^ハび^ニと^リる^ハあ^らむ^ハり^ハ我^ガを^シ河^ノの^所に^キき^よは^らあ^らね^と

と^モ河^ノ倍^ク此^ノき^やひ^よむ^しよ^りと^りて^らめ^しれ^らり^とら

あ^らね^との^後も^あ生^ずん^せい^乃河^と名^付て^書も

ち^てゆ^まと^と色^はや^くそ^のい^をれ^とと^記す^ハ

佛^ノ制^戒も^通居^とあ^らじ^法曹^乃律^ノを^経る^ハ

法^のあ^らじ^りその^みか^りと^成り^とさ^まな^しと^いふ^ハ



井蛙抄

三

日平公

ある家綱長

あまは北条喜とくをかくめあつめ成去のたまりり北条の暎
 判云何事も北条とをけり道いさすつゝし侍る然この
 ろろめ成と云相乃を来入んし侍る未草心ま侍り
 定ま御心し侍らんくし書う暎もらうくよりつひ
 のりよる侍るそよや侍らん

四位上人勅を百首

定家御長

いれくりり甲しつめ成子のなまら松にあらを世入
 方天信の家平公 兼深御長
 うら家御長

兼深のよのたのまの次之介なつめはる山乃んよを月とま

六百番平公

寄遊女也

友 侍

定家御長

心かよは侍きつは母のさめおもこしてうらり物い思つ
 判云友平下向のさうしてしつ人を河舟れ来向に
 来しつるやうよまきこ侍る奉

同平公

妻暎

友 侍

女房

見ぬ世まのし思ふのこよあなるあより昔のあむしよをれぬかの

七

信三

思のちたさるるにふるまてのれま其のきりの
 判云ある方ま曙たるじに早きこといひ有
 心のこれとくすしとておちあひし
 き持よゆるし

一々一々

中務の親王文毎二百首

雲雨をそあしけなだぬき
 民アし入道云是も次よ
 中務の親王文毎二百首

河強車好海し中に又しき

河強海云

ちし西へまきとほとみとる山原はまを記らてぬる本葉外
 うしきしあよかーし

法眼源兼抄云中野源氏後成女建長元年

軍八源氏の文とあよよらんきは文たきしあり

やうありとて就就あふきしきあしなる

ふしあむかしてきしけらうしなる

あふしなる神あ也とて故実ともをしなる

一志海

同抄す。

波のふらふらと風を吹かすてまのまゝにさぐりて
民の志ろきことと相亡父のし方なり
順徳院御一白首

約とめて志つるは橋乃とてよ白さけの漢書
京橋ハ橋乃とて説くおわくくと古きよも
御来ハ近奉志ろきことと相亡父のし方なり
とてはらとともも来生初子每人首海あり

あまのりよ満耳て駄那の思ひい

八雲御抄云定家志ろきことと相亡父のし方なり
属婦かなるよそのことゆくとまを相乃とる原
をわく一人よふまのすはよくひなり

私云御抄云一ろさば凡まの兼そあけり
字の秀弁な神よとゆれと相れとるき
てはあるへくは優ちるよけきそ人よふ
好かんぐるる人よは相御抄乃とれのと
一海書お飯の冥去子肉親とれ初名とる

秀隆（クワリ）は中井よきき著乃けり一是（ニ）あは
けしめてうのはきわひよかんきれぬいあ
まれあるよやびは製製の嵐と一秀（クワリ）の
あけりの（ト）緒乃あせに向（カ）後てあせ念（ニ）ふ
之ゆわすあよとゆはありけりい
しるれ一此字（ク）鑿て（ク）後（ク）者（ク）次
千又百番平合

八雲丸 頭照

散海しと書くとみるおし風さ全さう一書志曙

秀隆（クワリ）は中井よきき著乃けり一是あは
けしめてうのはきわひよかんきれぬいあ
まれあるよやびは製製の嵐と一秀の
あけりの緒乃あせに向後てあせ念ふ
之ゆわすあよとゆはありけりい
しるれ一此字鑿て後者次
千又百番平合

秀隆（クワリ）は中井よきき著乃けり一是あは
けしめてうのはきわひよかんきれぬいあ
まれあるよやびは製製の嵐と一秀の
あけりの緒乃あせに向後てあせ念ふ
之ゆわすあよとゆはありけりい
しるれ一此字鑿て後者次
千又百番平合

天は風初あ志ろ妙に乃とわする揚のあはれ

正治二年九月院法平合 曉雪

明める（ト）梢（ト）おれ（ト）を（ト）松（ト）の（ト）あ（ト）り（ト）と（ト）り（ト）志（ト）ろ（ト）き（ト）香（ト）れ（ト）あ（ト）の（ト）

一字の秀（ク）の（ク）詳（ク）れ（ク）す（ク）う（ク）せ（ク）い（ク）れ（ク）事（ク）

中務親王の御云

雲はかると成山ものなをそ横あうあなうくもあはれ

異音ノ
秀々

氏中入道云 婆河形重山但山鳥尾と存依
備能とあはなり

月夜歌云

山を登るとえの橋はかたむきあきよ海林の月夜
山を登るとえの橋はかたむきあきよ海林の月夜
けくんよのえ

一

六百番三合

九

季経

お遊風すすまつむまの風 東那々あはちよすすす
判云たす乃さ海をよまうきまやうけり月夜
ゆるげすすれつじまあとさるまのあこと
石を煮煮しや

同音合 石

題名

二升世よんてあしと思ふふのあつめそしそめまきん
たあやうなちす乃まよふの海美に不足よす
ゆるりたはれしを海をうとりしゆるめ

同音合

善宗報長

一かよふか

西行浄裳濯平合右

ならりるまき法之風と空りや。幸と入つはるあきり
判云たふすめ心あひつあむしてん也但んせつわよ
とんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん
ありのつらねふ公志とまらよはらよふあまよ
あふびらつるまき平乃さゆよらあか
衣美由府 まらよのうは

東橋美門は河自他隆地不海幸一はる海河

順徳院浄面首

花をんたわのめとまき有るゆまあてつる山のしは月
鶯花之構岡錦繡之山川よあつゆとを隠
之景句 煙霞之幽起見下海よりん死

院み千首 月照浄水 定家

秋林神はる風の如きをうらめしく思ふる布列の境
後大納言せが二十首 権伯

あはれせして海る浪の松風とちるふりやいづくを

大納言 典侍子世時 為成

判之由方乃くりのゆゑまじひともし小優なり
如しり但友中みまはるるこよけゆ優河かまじこ
よけさすてゆゑもや

玉葉集 十六

赤天御之為氏

ひそり六十のまら老ゆる幸代はるりてまゐるはけの御あま
一まよふか

く又百毒

七

赤連

あつきのまにら神もあつらりあつらにあつらるる者かま

永格黄門判云のあしよまりのあつらるる
外花乃色要中兼もつまふつまおの
うまゐるしてはるるあつらるるあつらるる

吹流院御百首

秋の珠やまきよあつらるる風ん花咲くははまはるる
宮城野乃あつらるる千草は花をふるるあつらるる
又又羨羨いりつもの河たあつらるる物あつらるる

續拾遺

あつらるる

一は... 二は... 三は... 四は... 五は... 六は... 七は... 八は... 九は... 十は... 十一は... 十二は... 十三は... 十四は... 十五は... 十六は... 十七は... 十八は... 十九は... 二十は... 二十一は... 二十二は... 二十三は... 二十四は... 二十五は... 二十六は... 二十七は... 二十八は... 二十九は... 三十は... 三十一は... 三十二は... 三十三は... 三十四は... 三十五は... 三十六は... 三十七は... 三十八は... 三十九は... 四十は... 四十一は... 四十二は... 四十三は... 四十四は... 四十五は... 四十六は... 四十七は... 四十八は... 四十九は... 五十は... 五十一は... 五十二は... 五十三は... 五十四は... 五十五は... 五十六は... 五十七は... 五十八は... 五十九は... 六十は... 六十一は... 六十二は... 六十三は... 六十四は... 六十五は... 六十六は... 六十七は... 六十八は... 六十九は... 七十は... 七十一は... 七十二は... 七十三は... 七十四は... 七十五は... 七十六は... 七十七は... 七十八は... 七十九は... 八十は... 八十一は... 八十二は... 八十三は... 八十四は... 八十五は... 八十六は... 八十七は... 八十八は... 八十九は... 九十は... 九十一は... 九十二は... 九十三は... 九十四は... 九十五は... 九十六は... 九十七は... 九十八は... 九十九は... 百は...

吹な... 一... 二... 三... 四... 五... 六... 七... 八... 九... 十... 十一... 十二... 十三... 十四... 十五... 十六... 十七... 十八... 十九... 二十... 二十一... 二十二... 二十三... 二十四... 二十五... 二十六... 二十七... 二十八... 二十九... 三十... 三十一... 三十二... 三十三... 三十四... 三十五... 三十六... 三十七... 三十八... 三十九... 四十... 四十一... 四十二... 四十三... 四十四... 四十五... 四十六... 四十七... 四十八... 四十九... 五十... 五十一... 五十二... 五十三... 五十四... 五十五... 五十六... 五十七... 五十八... 五十九... 六十... 六十一... 六十二... 六十三... 六十四... 六十五... 六十六... 六十七... 六十八... 六十九... 七十... 七十一... 七十二... 七十三... 七十四... 七十五... 七十六... 七十七... 七十八... 七十九... 八十... 八十一... 八十二... 八十三... 八十四... 八十五... 八十六... 八十七... 八十八... 八十九... 九十... 九十一... 九十二... 九十三... 九十四... 九十五... 九十六... 九十七... 九十八... 九十九... 百... 保季朝臣 千五百番 山... 系... 一... 二...

西の流長濯行の言

山の乃かき要けくまじの物さひななるおれ
たすけはるるありとくさるるてはあは
るり末白乃そのまやまこくくちもよて
ゆるりくま

一乃くまはまきりる

中務の親王文意三乃首り

春南のちいさくおれとく柳一乃首り也
是又あまの柳或人乃極く可め事一痛

いと玉皇遊車くゆて又りい

常れ物うりおるいしはれくお上は方一春をさる
才白く不優作

おけろよのちりはら乃おれはあは解るにと一考れ
上白く不優也

おれは原志の井もあはて花吹くはの文を

い田井もあはてるるは是非い

あはてて誰とあはしあはのけはよる夜く一
あはてて風さしあはのちりはるはあはる也

産業い

中務の親と云ふ事

おのゝめる物も海へはし海へはしと云ふ事
 氏へ云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 何れも



